京畿道外国語教育研修院現職日本語教師研修のための研修実施報告

―2005 年度韓国国内研修の実施について―

姜星鎭　許明子

要　旨

2005 年 9 月 12 日から 10 月 11 日の 1 ヶ月間にわたり、京畿道外国語教育研修院において現職日本語教師を対象とする韓国国内研修が実施された。本研修では、日本語のブラッシュアップを主目的とする必須科目の授業が 36 コマ（1 コマ 90 分計 3,240 分）行われた。また、部活動として 4 つの選択科目が開設され、ICT、ビデオ自習などの授業が行われた。

必須科目の教材は筑波大学留学生センターで開発した教材を使用し、聴解、読解、会話、作文、文法と誤用分析、教授法、特集の 7 科目の授業を行い、選択科目としては演劇、テレビショー、新聞作成、会話教材作成などの活動が行われた。

本稿では韓国の国内研修の概要及び授業内容について報告を行う。

【キーワード】現職日本語教師再研修　ブラッシュアップ　必須科目　選択科目

Report about In-service Japanese Language Teacher Training Program of the Gyeonggi-do Institute for Foreign Language Education: training in Korea in 2005

KANG Sungjin, HEO Myeongja

【Abstract】During the period of September 12th 2005 to October 12th, 2005, the Gyeonggi-do Institute for Foreign Language Education held a one month training program in Korea for teachers of Japanese. This training program aimed at improving Japanese language skills through a compulsory course consisting of 36 classes (90 minutes per class, 3,240 minutes in total). In addition, ICT, video self-education etc. were introduced.

The compulsory course was based on the teaching materials prepared by the International Student Center, University of Tsukuba, and consisted of the followed seven subjects as core modules; Listening Comprehension, Reading Comprehension, Conversation, Composition, Grammar and Error Analysis, and Teaching Method. Furthermore, four of the optional modules contained activities such as making drama, TV shows, newspaper creation , and preparation of conversation teaching materials.

【Keywords】in-service Japanese language teacher training, brush-up, core module, optional module

1.　概要

京畿道外国語教育研修院では 2005 年 9 月 12 日(月)から 2005 年 10 月 11 日(火)にわたって計 120 時間、京畿道内現職日本語教師を対象に再教育を実施した。最初の参加予定人数は 48 人であったが、４人の教師が個人的な事情により、1 人は臨時講師を採用できず不参加となり、男性 18 人、女性 25 人の 43 人が研修に参加することになった。今回の研修は韓国国内においても初めての現職日本語教師を対象とした長期研修であり、様々な不安がある中で研修がスタートしたが、研修生の全員が最後まで無事に研修を修了することができた。

2.　講師陣

講師は筑波大学留学生センターの専任講師２名(衣川隆生：会話・作文担当、許明子：文法と誤用分析・教授法担当)と非常勤講師１名(福留伸子：読解・特集担当)が研修期間全体を通して常在し、１名（西村よしみ：聴解担当)は前半２週間のみ担当し、後半は国際交流基金ソウルセンターから１名（三原龍志：聴解・教授法担当)と交代した。三原氏は聴解の残り１コマと教授法を許明子氏と合同で授業を行った。

また、筑波大学留学生センターのセンター長が開講式に出席し、特別講義を行った。その他は韓国の鮮文大学の安容柱氏がコンピュータを利用した日本語教育方法論として ICT 講義を行った。

3.　スケジュール及びクラス編成

3.1　スケジュール

研修期間中、研修生は全員合宿を行ったが、月曜日の朝研修院に集まり、金曜日の午後自宅に帰るスケジュールを考えて時間割を組んだ。研修の軸になる科目は必須科目であり、１時間目と３時間目に授業を行った。また、その他に選択科目と ICT 科目、特別講義、自習（ビデオ視聴)、模擬授業を２時間目と４時間目に行った。

１時間目:　09:00-10:30（90 分)（月曜日は 10：20～11：50）
２時間目:　10:50-11:50（60 分)（火曜日～木曜日）
３時間目:　13:30-15:00（90 分)（金曜日は 13：00～14:30）
４時間目:　15:20-16:20（60 分)（火曜日～木曜日）
５時間目:　16:30-17:30（60 分)（火曜日～木曜日）

ただし、この授業時間は火曜日から金曜日までのスケジュールであり、月曜日の午前中は 10 時 10 分までに研修院に到着するしたため１時間目の開始時刻は 10 時 20 分から 11 時 50 分までで午前中には 90 分１コマだけの授業を行った。また、金曜日の午後は自宅に帰るため昼休みを 60 分に縮めて、３時間目を 13:00 から 14:30 まで行った。

3.2　クラス編成

研修生 43 人は４クラスに分けられ、１クラスは 10 人から 11 人で構成され、４人の講師がそれぞれのクラスを担当する担任制によって運営された。各クラスには１名のクラスリーダーが、研修生全員の代表として１人が選出され、研修院及び講師との連絡及びパイプ役を務めた。

4.　研修科目

4.1　必修課目

筑波大学留学生センターで作成した教材を使用し授業を進めたが、各科目の授業時間数は次の通りである。

・聴解・読解・会話・文法と誤用分析：90 分　×　６コマ
・作文・特集：90 分　×３コマ
・教授法：90 分　×　６コマ(２クラス合同授業)

4.1.1　聴解

聴解は授業時間内に各トピックの聴解内容の重要なポイントを理解し、特に毎回課題を課してはいない。ただし、授業中に取り上げなかった内容に関しては自習とし、スクリプトを見ながら研修生が自主的に復習できるようにした。また、各課には韓国人日本語学習者が難しいと感じる日本語の発音練習を取り入れ、毎回聞き取る練習を行った。

授業内容としては、各トピックで扱っている素材の要点を聞いたり、文末情報や省略されている主語と目的語を推測したり､事実や意見の述べ方を注意して聞いたりする作業を行い、聴解力をあげるためのストラテジーを積極的に取り入れた。また、音声を聞く前に各トピックで扱う内容のデータについてグループで話し合ったり、聞いた後にその内容についてディスカッションを行ったりして、聞き取った内容の確認を行った。

聴解授業を行う上で最も大きな問題点としては、クラス内における研修生の日本語力の差が大きく、新出語彙の予習の確認が困難であること、聞き取った内容の理解度を把握することが難しかった。自習として課した聴解教材の復習を行ったかどうかについても確認することが難しく、提出された回答はほとんど同じ答えが書かれているケースもあった。

4.1.2　読解

読解はエッセー、小論文、新聞記事、インターネット上のデータなどの様々な種類の文章を読んで日本の若者ことばを理解する、敬語の使い方や問題点を把握する、日本人の時間意識について考察する、韓日の言語行動について比較を行うことを目標に授業を行った。授業の進め方は、読解教材の別冊にまとめている各課の語彙リストの予習を行い、授業時間中は

本文の読解を中心にした。授業後には各課の読み物に関連する新出語彙調べや新聞の見出しから内容を推測してまとめるなどの課題を与えた。授業は研修生各自の日本語力に合わせ、それぞれのペースで素材を読み解く個人作業が中心となった。
読解授業は語彙リストに基づいた予習が不可欠であり、語彙の意味を理解しているかどうかの確認が難しかった。さらに、語彙力の差を克服するための工夫が必要であろうと思われる。

4.1.3　会話

会話はプロソディ、シャドーイング、アクセント、イントネーション等の会話ストラテジーのための発音練習を中心に授業を行った。待遇表現、伝言、意見を述べる、比較・対比するなどの場面における表現形式の違いを理解し、各表現形式における会話ストラテジーを練習することによってより自然な話し方、自然な表現を見につけるのが目標である。授業後にはペアで発音を練習し、講師の部屋で録音しながらフィードバックを行ったが、自分の発音をモニタリングすることによって、研修生はプロソディを意識化することができ、発音練習に積極的に取り組むようになった。このような会話場面における発音練習中心の会話授業は研修生にとっては初めてであり、研修生自身の発音を見直すとともに学校現場で学生を指導する際にも応用できる有効な授業であった。
しかし、問題点としては各会話場面における表現形式を理解し、会話の練習を行うための時間が十分にとれず、予定していた授業内容の半分しか進められなかった。研修生にとってはコミュニケーション能力向上のために会話練習は最もニーズが高い科目であり、限られた授業時間内により効果的な会話練習が行えるための見直しが必要であろう。

4.1.4　文法と誤用分析

文法授業は教材の内容に沿って教材を中心に授業を進めながら、クラス内でグループワークを通して、韓国人の誤用の傾向や修正方法などについて議論を行った。各課の授業を終わった後は各文法項目を使って３文ずつ例文を作る課題を与え、授業内容の理解度を確認した。提出された課題は講師が間違いを訂正し、各教材で扱う文法内容のみならず、日本語の表現、前後の文脈の捉え方、語彙の使い方についてフィードバックを行った。

しかし、文法と誤用分析では韓国人学習者には学習が困難とされている「（ら）れるの意味」（受身、可能、自発、尊敬）、自動詞と他動詞、使役、副詞と擬声語・擬態語、授受表現、自作文法教材作成であり、ヴォイスを中心とする内容を扱ったが、６コマだけではすべての内容を扱うことができず、予定されている時間内に終わることができなかった。また、クラス内における研修生の日本語力の差が大きく、教材の難易度においてもさらに調整が必要であろうと思われる。

4.1.5　作文

作文は３コマを予定した。まず、説明文、意見文の文章構造、書き言葉の表現形式を理解した後、与えられたテーマについて 800 字の作文を行い、フィードバックを行う方法で進めた。作文は２回の授業を行い、最後の１コマは課題のフィードバックを行った。

作文の授業に関して最も大きな問題点は研修生が日本語による作文の経験が少なく、作文に対するニーズやモチベーションが低いことから必須科目の中には最も負担が大きい科目となったことである。研修生の中には書き言葉の文構造や表現形式に従って長文を書いたのが今回初めてだった人もいて、学校現場中心の日本語教師の作文能力向上のための動機付けや方法において課題が残った。

4.1.6　教授法

教授法は２つのクラスが合同で授業を行い、研修生がそれぞれの学校で使用している日本語教科書を持参し、教科書分析を行いながら、教案作成を中心に授業を行った。また、韓国における第２外国語としての日本語教育の現状を再認識し、日本語教師としての研修生自身について再考する時間を設けた。また、学生の学習意欲を高め、日本語の授業に積極的に参加できるようにゲームや日本事情を取り入れた授業の進め方を学んだ。

インターネットの様々な情報や素材を生かした教具を作るために、国際交流基金日本語国際センターで運営する「みんなの教材サイト」等のサイトを紹介し、動画を利用した日本文化の紹介の方法などについても取り上げた。教授法の最終的な目標は、教科書分析、授業分析など行った後、各自が教案を作成し、お互いの授業について長所、短所を生かし学生のニーズに応えられるような授業計画を立てることである。

教授法の授業を通して研修生は他の学校の現状や授業のやり方などについて情報交換を行い、より良い授業へ改善するための議論を行うなど、他の必須科目とは異なる実践的な授業となった。

4.1.7　特集

特集では日本語の言葉あそびを通して、日本語の面白さ、楽しさを感じることを目的に、俳句、川柳、オノマトペ、なぞなぞゲーム、落語などの話芸に焦点を当て、作品を鑑賞し、創作する活動を行った。特集を除く他の授業では言語的能力の向上が目的だったのに対して特集は日本語そのものの楽しさを理解することが目的だったため、授業中は声を出して作品を詠んだり、日本語のリズムを体感したりする活動を行った。

特集の最終的な目標としては、３コマの授業を通して理解した俳句、川柳、落語の内容に基づいて、それぞれ１つの作品を１枚にまとめ提出することであったが、研修生全員がそれぞれの感性を生かした作品を提出した。言葉あそびの活動を通して日本語のリズムを体感するという授業は他の必須科目とは異なる授業形態であり、研修生からも高い評価が得られた。

4.2　選択科目

4.2.1　目的及び概要

選択科目は学校のクラブ活動のような性格を持った科目であり、研修生各自の興味と特技を生かして行う部活活動である。各科目は講師がそれぞれ４人の講師が指導を担当し、研修生と一緒に作品を完成させることを最終目標にしている。その過程で講師と研修生は日本語でコミュニケーションを行い、クループ内での話し合いを通して日本語力を向上させることと、部活活動の経験を生かして学校現場で学生の部活を開設し運営できるようにするのが目的である。

研修生たちに各自が希望する選択科目を第 3 希望まで提出してもらい、その結果に基づいて研修運営部から各活動の人数の調整を行った。

選択科目のための教材として特別に準備したものはなかったが、部員たちが相談して作業の流れとスケジュールを決め、活動を行った。最終的に完成された作品の発表時間を設け、各選択科目クラスで作った作品を発表できる場を作った。発表会では、各選択クラスの活動内容と作業過程、作業中の困難な点、克服するための工夫等を発表し、他の科目を選択した研修生たちと情報を共有できるようにした。

・授業(作業)：60 分×６コマ
・発表（演劇を除いた３科目)：60 分×１コマ
・演劇発表：60 分×１コマ

選択科目は研修院側で提案した３科目(演劇、新聞作成、TV ニュース作成)と筑波大学側で提案した１科目（会話教材作成）を開設した。

１）演劇（許明子担当)：演劇を通じて総合的なコミュニケニション能力の向上。
２）新聞作成（福留伸子担当)：日本語で新聞作成を行う過程で作文能力を向上。
３）TV ショー作成（西村よしみ、三原龍志担当)：日本語による動画ニュースを製作することによって作文、会話、読む能力を含めた総合的な日本語力の向上。
４)会話教材作成（衣川隆生担当）―会話教材作成を通して総合的な日本語力の向上。

4.2.2　選択科目の準備過程及び内容

１）演劇班：日本昔話「桃太郎」を脚本化し、14 人で演劇公演を行った。演劇を発表するまでの過程で最も大きな問題は練習時間の不足だった。必須科目や課題、その他の活動が多く、演劇を練習する時間がとれず、せりふを覚えたり、小道具を準備したりするのは個人作業となった。選択科目の６コマ以外にも早朝や夜間に集まって、全体の流れを確認し、完成となった。演劇を通して日本語の練習をしたり合同作業を行ったりする過程は非常に有意義だったが、研修生には負担が大きく時間の調節に行う必要があると思われる。

２）新聞作成班：第２週目に講師陣へのアンケート調査結果や壁新聞を作り、掲示した。その後、授業風景や研修生の教師としての満足度などを含めた様々な質問に対し、アンケート調査を行った結果などを掲載した「パイン新聞」を作品として 作り上げた。
３）ＴＶショー班：研修院の動向や研修生の生活紹介、講師へのインタビュー、スポーツ大会の紹介、好きな男性・女性のタイプに関するアンケート調査結果など、１ヶ月間の研修院の生活に密着して、報道番組の形式で作品を作りあげた。
４）会話教材作成班：日常生活における様々な場面を想定し、日本語でどのように表現するかについて動画形式で作品を作った。この活動で完成した作品は実際に学校現場に持ち帰り、授業でも応用できるようにするのが最終目的である。会話教材作成の過程における問題点としては、録画したビデオを編集する機材の不足、練習、録画にいたるまでの準備時間の不足などが上げられる。したがって、担当した講師が編集を行うことになり、研修生と担当講師に大きな負担がかかってしまった。

4.3　その他の科目

その他の科目としては特別講義、ICT、模擬授業、資料調査、文化体験、運動会、筆記試験、会話テストなどの時間を設けた。

１）特別講義

①・講師：筑波大学留学センター長　シュテファン・カイザー
　・主題：「日本語と漢字、日本人と漢字」（120 分）
②・講師：京畿道外国語教育研修院 院長
　・主題：「望ましい教師象、日本語教師象 」（60 分）
③・講師：京畿道外国語教育研修院 教授部長
　・主題：「日本語研修が始まるまで」（60 分）

２）ICT

・講師：韓国鮮文大学　安容柱氏
・主題：デジタルカメラと授業資料作成、Window Movie Maker の活用
・時間：120 分×３コマ

３）模擬授業

・講師：京畿道外国語教育研修院　　姜星鎭
・主題：日本語の教授法についてのアイディア共有
・時間：60 分×５コマ
・**目標：**
　ｉ）学校現場に応用できる有効な教授法を紹介して授業に関する新しいアイディアを共有する。

ⅱ）教室状況に発生する多くの問題点を議論し、その解決案を講ずる。

ⅲ）授業現場に取り入れられる新しい戦略と資料及び情報を共有し、教授法の改善を図る。

・授業進行方法：

ⅰ）各クラスの３～４人が１つのグループを作り、グループワークを通して各テーマの発表内容を決め、準備を行う。

ⅱ）１グループ当り、選定した主題に対する議論の要約書を作成し、５分間スピーチを行い、質疑応答の時間を設ける。(１、２時間目)

ⅲ）議論の主題と関係する指導要約書を作成して授業の流れと利点、戦略などを発表する。(３、４時間目)

ⅳ）作成した授業指導案を中心に授業活動の重要な部分だけを韓国語もしくは日本語で模擬授業を行う。(３、４時間目)

ⅴ）発表の時、他のグループは配られた評価書に発表するグループの評価書を行う。(３、４時間目)

・各チームが選定した発表主題：

ⅰ）遂行評価の問題点と解決方法

ⅱ）協同学習を通じた指示代名詞の指導方法

ⅲ）効率的な文字指導の方法

ⅳ）効果的なクラス内水準別授業の進め方

ⅴ）日本文化を通じて日本語の指導する方法

ⅵ）アニメーションを利用した授業の進め方

ⅶ）ICT を活用した効率的な日本語の指導方法

ⅷ）協同学習を通じた効果的な文字指導の方法

４）ビデオ自習

・資料：日本のテレビ番組(「Project Ｘ」(NHK) ２本、「世界一受けたい授業」(日本テレビ)、「学校へ行こう」(TBS))

・時間：120 分×３コマ

５）運動会：フットベースボール、卓球

６）文化体験：ハーブ園、青南台(大統領の別荘)

７）資料調査：図書室あるいはインターネットを利用し、資料調査を行う。

・時間：60 分×４コマ

８）会話テスト：ビデオ教材の内容及び日本研修生選定のためのインタビュー

・時間：120 分×１コマ（１人当り 10 分)

９）筆記試験：読解(20 分)、 聴解(20 分)、文法及び誤用(20 分)

10）**アンケート調査**：研修全般的な内容（60 分×１コマ）

5. 評価

今回の研修で行ったすべての科目、活動について 100 点満点で評価を行った。各科目の比重は次の通りである。

① 必修課目：64%（聴解、読解、会話、文法と誤用分析：各 11%、教授法：10%、作文、特集：各５%）
② 選択科目：９%(合格／不合格)
③ ICT：５%(合格／不合格)
④ 模擬授業：５%(合格／不合格)
⑤ 会話テスト：10%
⑥ 出席：６%
⑦ 特別加算点：１%(総班長)、0.5%（班長、選択科目班）

評価は研修院側にとっても講師陣にとっても最も困難で神経を使う部分であった。研修を行い、その成果を評価することは必要であるが、研修生に成績をつけ、その結果が日本研修に派遣する研修生を選定する重要な部分になることには抵抗があった。
そこで、可能な限り客観的なデータに基づき、公平な評価を行うため、聴解、読解、文法と誤用分析は筆記試験を実施し、合格点数に達していることを一つの基準とした。会話、作文、教授法は授業時間の活動や課題提出物を中心に評価を行った。

今後とも研修における評価は大きな問題として残されると思うが、より客観的なデータに基づいて、公正な評価が行えるよう検討しなければならない。

6. 反省点と今後の課題

今回は第２外国語として現職日本語教師を対象に研修が行われたのは初めてのことであり、試行錯誤の中、研修が行われた。初めて実施する研修なので難しい点も多く、さらに経歴の長い人が中心になった研修だったため健康面の管理においても心配されたが、全員が無事に研修を修了することができた。また、研修生たちからの研修終了アンケートの調査結果においても研修の核心である必修課目が４点（５点満点）以上の肯定的な評価が得られ、研修は成功裏に終わったといえるだろう。

しかし、今回の研修と通して反省すべき点や今後の間然すべき問題点も多く見られた。この章では、今後の研修に向けて各領域において反省すべき点や改善すべき問題点をあげ、来年度の研修のための課題としたい。

1）必修課目

各科目の授業活動及び教材内容に関しては研修生から高い評価(4.0 以上)が得られた。

しかし、課題の課し方に関しては大きな問題が残っている。各必須科目から課題が出され、さらに選択科目とその他の科目の課題とも課題が重なることが多く、限られた時間内に課題を提出しなければならないということが研修生には大きな負担となってしまった。課題を出す時期、提出方法、課題の量などについてさらに検討を行う必要がある。

2）選択科目

各科目から学んだ内容も良かったし満足度も高い科目だったが、選択科目に当てられる時間が少なく、限られた時間内に作品を完成させなければならなかったために授業時間外にも準備に取り掛かるなど、他の科目に影響を与えることもあった。また、今回開設した選択科目はカメラやパソコンによる編集など機材を使用しなければならない科目が多く、研修生にも講師にも負担がかかった。来年度は機材を使用せず、日本語講師の得意な分野を生かして日本文化を体験できる科目を開設する方向で検討する必要がある。

3）その他

①特別講義

内容面では良かったが、講師の日程に合わせて研修の初日から特別講義を取り入れたため、研修全体に関するオリエンテーションの時間が十分にとれなかったのが問題である。研修初日は研修内容や評価、研修院における生活など、研修全般に関する説明を行う必要があるが、今回はオリエンテーションのための時間が十分に取れなかったために、研修生に十分な理解が得られない部分が多かったと思う。研修の初日は研修案内などを含めたオリエンテーションをし、研修院の生活に適応できるようにしなければならないだろう。

②ICT

デジタルカメラ活用と Window Movie Maker を使った教材作成、そしてパワーポイント活用法など、学校現場で応用できる良い授業だった。しかし、機材を利用する授業であるため、研修生の中でパソコンが苦手な人にはかなり難しい授業だったと思う。授業内容の難易度、研修生のニーズ、学校現場で応用できる実践的な活動など、さらに改善しなければならない授業である。来年度に向けて改善すべき点は、必ず研修生のニーズ調査を行った後、そのニーズに相応したプログラム活用法を教えることが重要である。また、研修生の機材の使い方のレベル、さらに課題の出し方にも工夫が必要である。

③模擬授業

最初の研修計画にはなかった科目だったが、計画を変更し資料調査の時間を減らして模擬授業の時間を作った。研修の途中に取り入れた科目であるため、結果的には研修全体の授業時間のバランスが悪くなってしまった。研修生同士のアイディア交換及び情報を共有する時間は必ず必要であるが、発表のための準備時間の不足が最も大き

な問題となった。しかし、研修生の中には良い反応を見せた人もいた。来年度に向けては、情報やアイディアを共有するために自由に議論できる場を提供する科目として検討したい。

④会話テスト

１対１の会話テストは研修生が自分の日本語力を自己判断できる機会になるので、必要なテストだと思う。しかし、今回の会話テストは方法面で改善しなければならない問題があったと思う。研修生全員を別の部屋に集合させて、一人ずつ講師の部屋に行ってテストを受けるようにしたが、次にテスト受ける人が講師の部屋の前で 10 分間待機しなければならない方法を取ったため、研修生に精神的な苦痛を与えてしまったと思う。会話テストの方法に関してはさらに工夫する必要がある。

⑤筆記試験

今回の研修では聴解、読解、文法と誤用分析の３科目において筆記試験を実施した。筆記試験の目的は授業で学んだ内容をどれぐらい理解しているかを確認すること、さらには評価の公正さ、客観性を持たせることであった。しかし、研修生は筆記試験に過大な負担を感じ、抵抗があったが、評価の客観的なデータを得るためには今後も筆記試験を実施する必要があると思われる。ただし、筆記試験の難易度を調整する必要がある。今回の筆記試験は研修生の日本語力では答えられない問題があったり、回答する時間が足りなかったりする問題が起きたため、研修の最後の時期に不満が生じることになってしまった。

以上のように、反省すべき点や今後の課題はたくさん残されているものの、第二外国語として現職日本語教師の研修が初めて実施されたことに大きな意義がある。さらに、日本の筑波大学留学生センターと学術交流協定を締結し、その学術交流の一環として現職日本語教師の研修が行われたことは、今後の韓国における日本語教育の新たな展望を示す大きな転機を作ったものではないだろうか。将来的には、京畿道の日本語教師のみならず韓国全国の日本語教師にも研修を受けられる機会が与えられ、韓国の日本語教育が量、質ともに向上されることを願う。

今回の研修の様々な問題点を十分に反省し、改善策を見直し、来年度に向けてさらに良いプログラムになるよう努力したいと思う。